

1

(記述題)

2 A

イ

B

エ

C

ア

(2 完答)

(3 順不同)

自分ひとり

それに、あ

4 エ

5 ア

6 イ

7 ウ

8 できる

9 X が

Y 案

Z ネ

10 a 当時

b 散歩

c 真実

1 a 費用

b 対象

c 投薬

2 X イ

Y ウ

Z オ

3 A ア

4 病院で取り

5 イ

6 新たに産み

7 (記述題)

8 命

9 ア

10 エ

11 子供の死

1

困っている人を助ける
といて絶対的なヘル
を母親がやぶつた
から。

(同意可)

2

力不足のため、幼い子
供の命を助けるこ
で、きなかっ
くやしき。た
無能力感と

(同意可)

配点

1 9・10	2 1・2	各2点×12=24点
1 1	2 7	各6点×2=12点
その他		各4点×16=64点
100点		

1

——線①の直後「なぜ」に息子自身の言葉が書かれているが、ここを用いてまとめるのは骨が折れるうえ、「パニックを起こした」理由にはならない。少し離れてはいるが筆者自身が「パニックになるのも無理はありません」として息子の心中を慮おもひはかっている箇所がある。そこで使うと書きやすかった。本文通読時に気づいておきたい関連である。

2 使い分けの微妙なものがいないか、初めにアエの選択肢を確認しておくといよい。Aは、理解していても従うことはできないと述べているところ、Bは、そこまでの具体的な説明を簡潔にまとめているところ、Cは、「よい」と「マシ」を並べて、そのいずれかだと述べているところである。

3 「ケース」は「場合」「事例」という意味の外來語である。——線②をふくむ一文には「あの状況でそれに従うことはできなかったし、従うのは最善ではないかもしれない……」と書かれており、「あの状況」「それに従う」が具体的にどのような状況でどのような行動をとることをはつきりさせることから考え始める。すなわち、「ふらふら」と「近づいて」くる「乱れた身なり」の「物乞い」を助けることが必ずしも「最善ではない」とすれば、どのようなよくない事態に立ち至るのかということである。

4 この問いに限らず、この文章で確実に読み取らなければならないのは「道徳」と「倫理」のちがいである。「道徳」は『○○しなさい』という絶対的で普遍的な規則』であると述べたあとで、「これに対しAは、現実の具体的な状況で人がどう振る舞うかに関わります」と述べているので、こちらが「倫理」についての説明であるとわかる。この対比をしつかりふまえて文章を読み進める。

5 4で確認した対比にいちいち立ち戻りながら選択肢をチェックする。アの「現実の規範」が——線③の「倫理『一般』」にあたり、同じく「身につけて」が「武装」に、「社会的人間」が「抽象的な主体」にあたる。

6 ——線④の直前の「そうでなければ」がさしている内容をまず考える。「Eが提示する普遍的な視点」がないとどうなるかを述べているところである。普遍的とはいってもどこでもあてはまることなので、その反対、すなわちその場の判断になるということである。

7 ——線⑤の直前の言葉を使えば『一般』として指し示されているものと『一般』が通用しなくなる事態』のズレである。

8 段落の残りの部分を確認すると「すべきだができない」という表現が見つかる。

9 X「くがてら」は「の」のついでに、Y「案の定」は「思っていたとおり」、Z「ホンネ」は「本当の気持ちや考え」という意味である。「本音」と「建前」はセットで覚えておこう。

10 a「当」の初めの三画が「学」の初めの三画と同じ形にならないよう注意しよう。b「散」は左側を正しい画数で書こう。c「真」も同じく正しい画数で書くよう気をつけたい。

2

1 a「費」の上半分の形に気をつけよう。b「対象」は「対照」「対称」といった同音異義語があるので使い分けを確認しておこう。c「投薬」は薬を調合してあたえることである。

2 X「右肩下がり」はグラフの線が右に向かって下がっていくようすを表しているが、本来用いられる言い方は「右肩上がり」である。Y「骨抜き」は、肝心な部分を取り除かれて価値がなくなっていること、Z「口うるさい」は細かなことまで小言を言うようすである。

3 「あげくに」は「十分くした最後に」、 「いたずらに」は何の効果も利益もないようす、「にわかに」は物事が急に起こるようすである。

4 院長との会話の前後に「答え」という言葉が出てくる。

5 直後の段落に「僕は死に囲まれているわけではない」とあり、これが気持ちの中心にあることがわかる。

6 直前の行に「深い失望」とあり、「僕」が落ち込んでいることがわかる。落ち込むと新生児室へ行くのである。5で確認した気持ちとも重なる内容だろう。

7 「込み上げる感情」は「前園先生」の感情だが、次の行の「僕たち」に前園先生もふくまれていることに気づきたい。関連があるから同じ段落で言及されているのである。

8 「そのかすかな明かり（＝小さな火花）」は……小さな儚い⑤を連想させた」という一文である。いわば「火花」にたとえられるものであるから、「子」や「死」は合わない。

9 「その責任」は自分が噎せ返った責任なので、明らかに八つ当たりである。

10 「何もなかったという演技」なので何かあったわけだし、「心がけて」なので気をつけなければ「何かあった」ことが相手にわかってしまう。そうならないようにしているということは相手を気づかせることであろう。

11 7からのつながりで考えられれば、内容についてはすぐに見当がつく。